

前川直哉『〈男性同性愛者〉の社会史 —アイデンティティの受容／クローゼットへの解放』

作品社、2017年3月発行

新ヶ江 章 友¹

戦前から戦後にかけて出版され続けてきた同性愛に関する情報が掲載された雑誌は、「同性愛者」の生存を左右するほどの重要な意味を持ったメディアであった。私がこれまで行ってきた「男性同性愛者」を自認する人々に対して行ってきたインタビューによると、その多くがゲイ雑誌を手にして初めて自分と同じ性的欲望を持つ人々がこの世に存在することに気づいたと語っている。「男性同性愛者」が自分自身のアイデンティティに気づくきっかけとして、このような雑誌をはじめとするメディアが果たした役割は大きかった。では、戦前から戦後にかけて、同性愛を扱った雑誌はどのような歴史の変遷を経て現在に至っているのだろうか。表現の自由について改めて考えるにあたり、この同性愛の雑誌の分析は、興味深いテーマである。

今回取り上げる前川直哉の『〈男性同性愛者〉の社会史』は、2011年に出版された『男の絆』の続編とも位置付けられる研究であり、『男の絆』が主に明治初期から1920年代までの男性同性間の性愛関係の歴史を分析したものであるとするなら、『〈男性同性愛者〉の社会史』は、1920年代から1970年代までを分析したものである。分析にあたって使用された資料は、いわゆる戦前の性欲学の文献や雑誌、戦後の「変態雑誌」や会員制同人誌、新聞や一般雑誌などである。

プロフィール

新ヶ江章友（しんがえ あきとも）：*大阪市立大学大学院創造都市研究科准教授

前川の研究における問いは、以下のように示されている。「本書は1920年代から1970年代までの日本を対象とし、同性に対して性的な欲望を持つ男性たちが、どのような経緯で『男性同性愛者』というアイデンティティを受容したのか、そして彼らが直面した『悩み』がどのようなものであり、その解決法をどう編み出して行ったのかを検証している」（前川 2017: 1）。つまり、たとえ同性である男性に性的欲望を持ったとしても、必ずしも「男性同性愛者」というアイデンティティを皆が受容するわけではないという考え方が前提となっている。その上で、あるものはなぜ「変態」「異常」「病気」などとされた「同性愛者」というアイデンティティを受け入れたのか、その受容の過程でどのような困難と向き合い、どのような解決策を編み出したのかを分析しようとしている。

まず序章では、先に述べた本書の問題意識を確認する。先行研究の批判的検討から明らかになったことは、これまでの研究においては同性に性的欲望を持つ男性が、性欲学により作り出された「男性同性愛者」というカテゴリーを権威盲従的に受け入れていったと考えられてきたが、前川は、アイデンティティの受容に際して様々な人々が悩んでいたのであって、その「内実」を分析する必要があると言う。前川がとりわけ強調しているのは、①同性に対して性的欲望を持つ男性たち自身を

「性欲学の一方的な被害者」と見るのではなく良き生を求めて行動する主体と見るということ、②戦前と戦後の連続性および不連続性に注目するということ、③男女の同性愛のジェンダーの非対称性に常に配慮するということをあげている（前川 2017: 16-17）。

第1章「『男性同性愛者』の登場」では、大正期に「同性愛」という概念が日本に導入され、その概念を当事者自身がどのように受容していくかを分析している。性欲学においては、「性欲」を個人や社会の活動にとって必須で重要なものとする一方、その逸脱を「変態性欲」として学問的に位置付ける。つまり、健全な「性欲」と異常な「変態性欲」を分けることによって、同性愛を病理として治療の対象とするのである。しかしながら、これらの性欲学の文献には、具体的な治療に関する記述がほとんど書かれていないと前川は指摘する。雑誌『変態性慾』は1922年から1925年までに出版された専門誌であるが、この雑誌の特徴は、「男性同性愛者」当事者が自らの悩みを読者投稿欄に多数投書しているところにある。周囲に打ち明けられない悩み、相手が見つからない悩み、結婚をめぐる悩みなどが投稿されていたが、悩みの特徴としては、同性愛を治療したいということではなく、自らを「男性同性愛者」として規定した上で、悩みを現実的に解決する方法を求めているということである。しかしこの『変態性慾』での読者投稿掲載は、ある読者が軍隊内の同性愛関係を投稿したことによりその後禁止される。1930年代の盧溝橋事件、日中戦争、太平洋戦争期には、公刊される雑誌や書籍で同性愛に関する記述が検閲によりほとんどなされなくなる。

第2章「『自分たちの城』を求めて」では、1950年代以降に出版されたいわゆる変態雑誌『人間探求』『風俗科学』と、そこから派生して生まれた会員制同人誌『アドニス』の分析を行う。『人間探求』や『風俗科学』は、同性愛に特化して扱

われた雑誌ではなかった。いわゆる生殖に基づく男女の対一の規範的異性愛関係から逸脱するような様々なセクシュアリティを扱うのが変態雑誌であった。しかし、その変態雑誌には「男性同性愛者」からの投稿が多く寄せられ、それを理由として会員制同人誌『アドニス』が創刊されることとなる。こうして会員同士の交流が活発化し、彼らは「そどみあ」というソドミーに由来する表現を用いながら自らの同性愛アイデンティティを表現していった。『アドニス』は同人誌であったために、十分な広がりを持つ雑誌とはなり得なかった。

第3章「クローゼット・メディアの完成」では、1960年に出版された『風俗奇譚』から1971年の『薔薇族』出版に至るプロセスを追っている。『風俗奇譚』も男性同性愛に特化した情報を提供していたわけではなかったが、読者と編集者との頻繁なやりとりを通して、男性同性愛者たちの「相手探し」のための回送システムのコーナーが紙面の中に作られていった。このシステムを通して「男性同性愛者」同士の文通が可能となり、『アドニス』のような同人誌とはまた異なる新たな読者の広がりを獲得できたという。『風俗奇譚』では性科学に関する専門家の言説はほとんど影を潜め、SM、フェティシズム、同性愛に関するグラビア、小説、読み物が多数掲載され、それらの性的嗜好が商業化・商品化されていった。ただし、『風俗奇譚』は男性同性愛に特化した雑誌ではなかったため、サドの女性に虐げられることを望むマゾの男性読者や、女性を苛めることに快感を求めるサドの男性読者もおり、それぞれの好みの掲載を多くしてほしいという編集者への要望が読者コーナーに掲載されていた。つまり、これまでは渾然一体となっていた性的欲望が、読者の性的欲望の表明により『風俗奇譚』の中で次第に種別化されていくこととなった。これが、1971年に日本で初めて出版された男性同性愛の専門誌『薔薇族』出版への助走となっているのである。

第4章「『結婚をめぐる苦悩』への対応」では、「男性同性愛者」が直面する結婚の問題に焦点を絞った分析を行っている。異性愛による結婚制度に対する批判は、戦前から戦後にかけての「男性同性愛者」の語りにはほとんど見られず、むしろこの結婚制度と齟齬をきたすことなくどのように生き延びることが可能なかを吟味していた。解決法として提示されるのが、妻に隠れて同性と交際する、妻に自分のセクシュアリティを告白し理解を得る、女性同性愛者と結婚する、という三つの方法であった。この中で最も支持を得ていたのが妻に隠れて同性と交際するという方法であったが、このような対処は、「男性同性愛者」の男性ジェンダーの特権性を利用することによって可能だったのである。

本書は、1920年代に「男性同性愛者」というカテゴリーが作られた後に、そのカテゴリーを用いながら人々が自らをどのようにして「男性同性愛者」として同一化していったのかを分析した最初の本である。この「男性同性愛者」というカテゴリーを受け入れるか受け入れないか、仮に受け入れた場合、自らに向けられるスティグマにどう対処しながら生きていくのかの生々しい葛藤を丁寧に分析している点が大変興味深い。2018年現在、

日本でも同性パートナーシップ制度や同性婚をめぐる議論が行われるようになってきた。しかし同性婚の議論も、実は前川が分析する1920年代からの同性愛の議論に違和感なく位置付けられる。なぜなら、結婚について悩んできた「男性同性愛者」たちは、この結婚制度そのものを批判しようとはしてこなかったからである。異性愛／同性愛に限らず、この結婚制度についてどう考えるのかが、現在歴史から問われているのではないだろうか。前川の研究は、その点を鋭く指摘しているように思える。

最後に個人的に興味を持ったのが、いわゆる戦中の同性愛である。前川の研究では、この時代の資料がすっぽりと抜け落ちているが、驚くことに、1920年代と1950年代の同性愛言説は、ほとんど連続しているように見える。戦中の資料がないからといって、この時代に同性愛関係がなかったのかというと、そうではないだろう。軍隊と同性愛など、まだまだ残された興味深い研究テーマは残されている。とりわけ現在の政治状況によって表現の自由が規制されかねないこれからの時代にとって、戦前・戦中のセクシュアリティについてはさらなる研究が今後必要となるであろう。